邪馬台国論
2章 『魏志倭人伝』解読

絶対認識を曲げず

「伊都国」

松野連姫氏系図には熊(鹿文)から厚(鹿文)まで約250年の空白がある。姫氏系図にはいかなる王の名も書き記していないが、姫氏系図・熊王から姫氏系図・厚王までの間、中国王朝の史書には「倭王」が登場する。女王卑弥呼である。

和光中(178～183)　倭國乱(三国志)

魏　景初2(238)6月、倭の女王、大夫難升米を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。
太守劉夏、吏を遣わし、将って送りて京都に詣らしむ。
魏　正始元年(243)、太守弓遵、建中尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。
正始4(243)　倭王、また使大夫伊聲耆・掖邪拘等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・綿衣・帛布・丹・木拊・短弓矢を上献す。掖邪拘等、率善中郎将の印綬を壱拝す。
魏　正始8(247)　倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭戴烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。
魏　正始9(248)　卑弥呼以て死す。大いに塚を作る。更に男王を立てしみ、国中服せず。
魏　嘉平1(249)　また卑弥呼の宗女壱与年十三なるを立てて王となし、国中遂に定まる。
壱与、倭の大夫率善中郎将掖邪拘等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。
晋　泰始1(265)　魏亡び晋武帝即位
晋　泰始2(266)　倭女王遣使朝貢

古来、数多くの研究者が卑弥呼の国に足を一歩も踏み入れることができなかった。私たちは今から始まる女王国への旅の終わりに、女王の都にたどり着くことができるであろうか。そして、今まで、数多くの旅人が会うことができなかった女王に面会できるであろうか。陳寿を信じ、誠実に事を運ぶしかない。

旅程を変更せず

卑弥呼の国名については正史によって異なる。ここでは単に「女王国」として進めていきたい。「女王国」とは卑弥呼の都が存在する国という意味で使う。

女王国への旅程は「里」と「方角」によって示されている。ここで確認しておきたいことがある。私たちは、『倭人伝』旅程の「里」と「方角」を変更することは絶対しないと誓言して進もう。

もう一つ、「一里」は現在のメートル法でいえば何メートルか、確定しなければならない。

『倭人伝』の一里の長さについては、「倭韓の里は古周尺の尺度で一里＝100メートル」という立命館大学教授、藤田元春氏の説が最も妥当である。氏の説のように、『倭人伝』の里は、韓国と日本で共通しなければならない。

1里を100mである。では、この道のりをどのようにして計測したのか。確証はない。誰でも思い浮かべる方法は、歩幅と歩数である。300歩をもって1里とする。一歩が30cmほどである。
300歩をもって一里とすれば、陸路の道のりはほぼ正確に計測できる。

では、私たちは、女王卑弥呼の時代に帯方郡から女王国までの道を歩んでいくことにしよう。

伊都国は「怡土（前原市）」か？

女王国旅程において重要な国は伊都国である。この国を、『倭人伝』は「東南陸行五百里到伊都國」と書いている。
『倭人伝』における伊都国までの旅程は次の通りである。

帯方郡治‥‥狗邪韓国‥‥対海国‥‥一大国‥‥末盧国‥‥伊都国

末盧国までは、ほぼ全ての研究家の見解は一致している。対海国は対馬市、一大国は壱岐市である。末盧国は松浦半島、唐津である。

伊都国は関してはどうか。古田武彦氏、直樹孝次郎氏の見解を聞いてみよう。

> 「伊都国」はこれは言うまでもなく、糸島半島です。従来説では、糸島半島の平野部全体ですが、私は前原町付近を中心として、「糸島水道」近傍だとおもっていることはすでにのべた通りです。
> （『邪馬壱国への道標』古田武彦　角川文庫）

> 末盧國、伊都國、奴國辺りまでは行程記事の方位などには問題はございますが、地名の推定には疑問はあまりありません。末盧國は松浦半島の松浦、今の呼子ないし唐津付近、伊都國は平原・三雲というような弥生時代の著名な遺跡のある福岡県前原町、奴國は那津のある博多付近、ここまではまちがいない。
> （『邪馬台国と卑弥呼２』直木孝次郎　弘文館）

万人が認める「伊都国＝前原町」である。検討されつくされている。疑問の余地ない。誰もが認める真実であると思われている。だが、果たして、伊都国＝前原町は本当に正しいのか。ここにおおきな落とし穴が存在する。

古田氏が、「言うまでもなく」と断定し、直木氏は、「ここまではまちがいがない」と述べている。その末盧国（松浦）－伊都国（前原町）」の行路を地図で示すと、下図のようになる。

では、この地図を見て、さて、この行路はあり得るか。古代史をリードするお二人の“確信”にもかかわらず、この行路はまずあり得ない。あり得ない行路を二人共想定していると私には思われる。

もし、あなたが今、壱岐・印通寺に住んで居るとしよう。ところが、転勤で福岡県前原市に転居しなければならなくなった。あなたは運送業者に引っ越しを頼む。すると、運送業者は、この壱岐－唐津－前原ルートを持って来た。あなたはどう返事しますか？「ウン。これで良い」と云うか、それとも、「何これ！」と云うか。
私なら即座にその業者に変更を要求する。いやいや、未だ納得できないと言われる方がいるかもしれない。それでは、これはどうですか。今、あなたは前原市に居るとしましょう。そして転勤で壱岐・印通寺に引っ越しすることになった。業者は前原－唐津－壱岐ルートを示した。
「このルートがいいですよ」と、あなたは、「そうだね」と契約を結び、費用を支払いますか？

陸路の必然性

この判断は帯方郡使が判断しても恐らく同じ結果になる。伊都国が前原市と比定すると、末盧国から伊都国へは陸路を行く必要がない。壱岐から直接海路を前原市へ向かえばよい。ところが、『倭人伝』は末盧国から伊都国への旅程は「陸路だ」、と書いている。

ここが陸路であることの意味は何か。何故、陸路なのか？この陸路は船では行くことができない、船から降りて歩かなければならないから、陸路なのである。海路が可能ならば、陸路を行く理由がない。伊都国が前原市であるならば、陸路の必要は生じない。

伊都国が前原市とすれば、陸路の必然性がない。出発が壱岐、目的地が前原市の場合、或いは、その逆の場合でも、船は壱岐から前原市へ直行する。末盧国での下船は不要である。また、荷物を持って陸路を歩くより、船で海路を行く方がずっと楽で、速い。しかし、『倭人伝』旅程では「末盧国で下船」「伊都国へ陸路」は絶対である。この二つの国を欠いては、旅程が成り立たないという存在である。

末盧国に上陸して、次は、陸路をとらなければならない国、海路では行くことができない国、それが伊都国である。だとすれば、論理上、陸路は末盧国から必ず内陸部に向かわなければならない。伊都国は海に面した海岸線の国ではなく、内陸部の国となる。

この事情は、壱岐から博多へ行く場合も同じである。天武天皇の世に「新羅」「高麗」「耽羅」の使者が度々天武を訪れている。その時、これらの国使は、壱岐から博多に直行している。途中、唐津に寄港して、陸路を来たわけではない。同じ道理である。

『倭人伝』において、帯方郡使が末盧国に上陸したのは、そこが内陸部の国「伊都国」への入口だったからである。末盧国は内陸に存在する伊都国へ向かう陸路の出発点の国だった故に、ここで下船して歩いたのである。

この道理を延長して考えてみよう。「陸路必然」という前提に立てば、女王国を、例えば、博多に比定する、或いは、奈良に比定するという説は全て成り立たない。博多比定、奈良比定では末盧国からの陸路は不必要である。壱岐から直接、博多に向かえばよい。壱岐から直接、大阪に向かえばよい。どちらの比定においても末盧国に上陸する必要はないのである。

末盧国・唐津

末盧国はどこか。壱岐から「千余里」、現在の単位で100kmぐらいの港は、「伊万里湾」「唐津港」「博多湾」のいずれかである。最も相応しい港は、唐津である。唐津という名前は「唐」の港、つまり中国からの使者が往来した港であることを示している。また、唐津港に注ぐ川の名前は松浦川である。この名には「末盧」の名が残る。古来中国との交流の窓口であった唐津を本線にして進もう。

さて、唐津に入港する。ここから伊都国への行路は「東南陸行五百里」である。

東南陸行五百里

直木孝次郎氏は、先ほどの著書で、「行程記事の方位などには問題はございますが、」と述べている。万人が「これだ」と考えたルート、唐津から前原市の方角は「東南」とは云えない。その方角はいかに測っても「東北」である。

小学生6年生に上の図を見せて、「唐津から前原市の方向は東南ですか東北ですか」、と質問して、「東南」と答えたら、あなたは「正しい」と言いますか。北へ行くか？南に行くか？この方向は正反対なのだから間違える人はいない。

『倭人伝』では明確に、「東南」である。帯方郡使はこの認識の下に伊都国に到着している。故に伊都国は「東南陸路」と明記した。

この方角は“絶対認識”である。ここを曲げてはいけない。曲げてはいけない所なのに、直木氏は、「行程記事の方位などには問題はございますが、」と、言いつつ、曲げてしまっている。前原市は唐津から見れば「東北」である。ここを曲げて伊都国に辿り着くことはあり得ない。

何故、直木氏はここを曲げてしまうのか？直木氏だけではない。古田武彦氏もまたここを曲げている。名だたる古代史の大家が全てこの“絶対認識”を曲げている。方位と距離を変更しては目的地に行けないのは道理である。どちらを間違っても目的地にたどり着けないのは自明の理である。

> 筑紫の風土記に曰はく、逸都の県、子饗の原、石両顆あり。一は片長さ一尺二寸、周り一尺八寸、一は長さ一尺一寸、周り一尺八寸なり。色白くして鞭く、円きこと磨き成せるが如し。
>
> （「釈日本紀巻十一）

多くの研究者が、『倭人伝』伊都国を前原市に比定する根拠は、この「逸都の県」にある。平原遺跡等も伊都国比定の根拠に挙げられるが、平原遺跡に伊都の名が残っている訳ではない。この『風土記』には「逸都（いと）」の名が明記されている。『風土記』の「逸都（いと）」が『倭人伝』の「伊都国」だと判断して前原市を伊都国に比定する。

しかし、「逸都（いと）」は「縣」の名前である。一方、「伊都」は国名である。この二つは異なる。何度も言うが、『魏志倭人伝』は「伊都国は末盧国の東南」と書いている。一方、「逸都の県（怡土郡）」は末盧国の東北である。

「東南陸行」は、何度も、『伊都国」へ往復した帯方郡使の認識である。この認識に従って帯方郡から伊都国までやって来た。方向を間違えた、なんてことはありえない。

末盧国から東南方向に伊都国は存在したという認識を曲げて、「怡土村（前原市）＝伊都国」とすると、この先、いかに、『倭人伝』女王国を解明しようとしても、決して都へ行き着くことはない。

「東南陸行五百里」は国道203号線

末盧国は唐津である。そこから東南方向に陸路で５００里（５０km）行けば伊都国に至る。このように読まないで何と読む。他の読みはない。

郡使は唐津から東南方向に伸びる街道を進んだ。郡使は道無き荒野を東南に進んだのではない。当時すでに、「東南に向かう陸路」が存在した。郡使はこの名のある陸路を進んだのである。唐津と伊都国を繋いだ道は

当時の幹線道路であった。そして、その道は現代において多くの人や車が行き交う道である。その道とは、国道２０３号線である。

この国道は、唐津から「東南」に向かう。この「東南陸路」は海の玄関口・唐津と佐賀を結ぶ幹線道路である。実際にこの道を車で走ってみた。松浦川に沿って遡り、途中から支流の厳木川を遡る川沿いの良い道である。

『魏志倭人伝』が、末盧国を「行不見前人」と脅かすものだから、「東南陸路」は山越えの険しい道かと覚悟して行ったが、全然走りやすい。川に沿って登っていけば、自然と多久に至る。多久は宿場町として発達した町である。郡使もここで一泊したのであろう。そのあとは山道となるが、難所はない。

伊都国は佐賀市

唐津から国道203号線を東南に約５０km。行き着く国、伊都国とは佐賀市である。

吉野ヶ里遺跡

『魏志倭人伝』には伊都国について特記する事項が二つある。

(1) 世有王
(2) 女王國以北特置一大率検察諸国畏憚之常治伊都國

女王国より北には「一大率」を特置した。「一大率」は「常に伊都国を治す」。「率」とは「軍」の意味で「一大率」とは“軍の大隊”だと考えられている。伊都国には大きな軍隊が存在した。その軍隊が常に伊都国の治安を担っていたという。

もう一つの特記事項は「世有王」である。伊都国には代々、男王が居た。「松野蓮姫氏系図」には男王が次のように記録されている。

忌－順－恵弓－阿岐－布怒之－玖賀－支致古－宇閉－阿米－迮鹿文－宇也鹿－熊鹿文・・・・・
厚鹿文

系図は初代王「忌」から始まる。「忌」は本来「姫」である。故に「姫氏系図」と云われ、その国は「姫国（キコク）」と言われた。松野蓮姫氏系図では二代目の王が「順」である。この王の時に「委奴国へ移住した」と系図に傍書きされている。

佐賀市には有名な古代遺跡がある。吉野ヶ里遺跡である。この吉野ヶ里遺跡が卑弥呼の国と考える研究者もいるが、それは誤りである。吉野ヶ里遺跡は邪馬壱国ではない。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、次のように結論づけている。

(1)　年代に関しては「吉野ヶ里」が栄えたのは紀元二世紀頃まで。卑弥呼の時代、三世紀にはもはや衰えている。
(2)　北墳丘墓がある。ここには十四基の甕棺があった。この甕棺に埋葬された人物は「王」と考えることができる。
(3)　この歴代の王はおよそ二千百年前から約百十年間である。
(4)　「吉野ヶ里遺跡」は邪馬台國ではない。　　『吉野ヶ里遺跡は語る』学生社

中国の春秋時代、戦乱の中で滅びた「呉」から渡来して来た王家一族「忌」は有明海を北上した。「忌」は、「越」の追撃を恐れていた。「越」の軍勢がいつ襲来してくるか分からない。よって、「忌」は有明沿岸からかなり内陸部に入ったところに「忌国」を打ち建てた。そこは菊池郡と伝わる。

その後、二代目の王「順」は「忌国」を出て、有明海の最北部まで進んで、もう一つの国を作った。彼もまた「越」を恐れた。有明海を遠望できる「楼観」を立て、防御を固めた。

「忌」、「順」は「有明海を北上してくる越軍」を想定していたのであろう。その場合、一国で戦って勝利する確信はない。だが、二国で戦えばどうであろう。例えば、「忌」の国が応戦している間に、「順」の国が背後から越軍を挟み撃ちにする。これは勝利できると考えたのかもしれない。

あるいは、姫氏一族の領土を九州全体に拡大しようとしたのかもしれな。

いずれにしても、「順」は早々に新しい国を打ち立てた。「順」が作った国が「委奴国」である。倭王「熊鹿文」に与えられた金印「漢委奴国王」の「委奴国」とはこの国である。「順」による「委奴」建国がその後の日本史を大きく動かす要因となった。

この「委奴国」はどこに存在したか。吉野ヶ里である。吉野ヶ里遺跡が「委奴国」である。

その後、「委奴国（吉野ヶ里）」と「忌国（菊池市）」の間に人や物の行き来が生じた。その交通の要路には弥生集落（弥生国家）が次々と誕生していったと思われる。

松野連姫氏系図は二代の王「順」から九代の王「阿米」までを記録している。
順－恵弓－阿岐－布怒之－玖賀－支致古－宇閉－阿米

「順」から「阿米」まで８人は「姫氏」の「委奴国王」である。やがて、「越」が滅び、その脅威が去ると、四代「阿岐」から八代「宇閉」までの「姫氏」委奴国王は、「委奴国」から外の世界に飛び出し、九州北部、九州東北部にそれぞれの独立国を作った。

『記紀』には彼らの名前に由来する国が多く現れる。神武が東征時、戦場となった「宇田」も「宇一族」の土地であり、、神武が滞在した「阿芸宮」も「阿一族」が作った国である。

第九代「阿米」は更に飛躍する。彼は、軍勢を引き連れて彦島に現れた。よってこの地は「高地・阿米（訛って天）・原（集落）＝高天原」と呼ばれることになった。「阿米」が、『記紀』神話が伝える始原の神「天之御中主神」である。後に、この集落の主となった女性が「照」である。神武天皇家祖先神、「天照大神」である。その後、「阿米」は瀬戸内海を東進して、奈良（纏向）に達し、国を興した。彼が天皇家の祖である。

「阿米」より時代が下り、系図には現れない紀元二世紀頃の委奴国王は、「吉野ヶ里」から平地が多く、海上交通に便利な佐賀市に移住したと思われる。そして、新しい「委奴国」を作った。これが『倭人伝』「伊都国」である。卑弥呼の時代は、吉野ヶ里の「イトコク」は衰退、佐賀市の新しい「イトコク」が繁栄していた。

委奴国王

吉野ヶ里の広大な遺跡の住居は竪穴式住居であるが、「北内郭」と云われる厳重に防御された環濠集落には高床式建物が存在していた。ここが王の住居といわれる。

「大型の祭壇を持つ首長の居住や祭祀の場と考えられる。」　（吉野ヶ里公園管理センター発行）

「北墳丘墓」は南北40m、東西30m、高さ4.5mの長方形に近い墳丘墓である。現在、発掘時の状況のまま保存されている。

その墓地に埋葬された甕棺十四基の中からは、有柄細形銅剣やスカイブルーのガラス製管玉七八個など、被葬者の身分を示す副葬品が発掘されている。これらの副葬品からもこの甕棺の人物は王だと考えられている。

甕棺十四基に埋葬された王は「松野連姫氏系図」に書かれた王家の人々であろう。展示室にある下の塑像は甕棺に残る頭蓋骨から復元された顔である。この人物が委奴国王である。九州弥生文明を切り開いた

栄光の姫氏の王である。古代中国「呉」にルーツを持つ王の顔立ちは「楚」の英雄、項羽の肖像画とどこか似ているような気がする。